

## 言語的社会化試論

— 母親のことばを中心にして —

萩原元昭(群馬大学) 望月重信(明治学院大学)

馬居政幸(東京教育大学大学院) 飯田浩久(筑波大学大学院)

本誌表は、J. Cook-Gumperzの考案になることばの分析のための coding grid を批判的に検討することを通じて、social control 場面における母親のことばを定証的に分析するための方法上の諸問題に言及する、言語的社会化の試論である。

## 1. 本研究の目的と全体の枠組

社会化過程における言語の一機能として、G. H. Mead は、言語を含む意味シンボル (significant symbol) の獲得が自我の自己対象化につながると述べ、個人の自我=主体形成に果たす言語の役割を指摘している。この立場にたつとき、言語的社会化のあり方を問うことは、解釈、思考、判断の主体形成のあり方を問うことになる。この観点から B. Bernstein は言語コードの違いが学習の型の違いに結びつくことを指摘している。一方、言語はそれ自体が社会性を帯びている。言語の様式、言語になされた意味などは、社会的に規定されているのである。

ところで、言語は幾つかの機能を果たしている。なかでも言語の規範的 (regulative) 機能は、社会的学習において重要である。なぜなら規範的機能を果たす言語は、その背景にある役割体系、規範体系と不可分に結びついているからである。そしてこの機能は、social control 場面においてとりわけ明確にあらわれる。そこで本研究は、母親が social control に関して用いることばに焦点を合わせた。

さきに述べたように、言語は一方で学習と結びつき、他方で社会性を帯びている。この観点によれば、母親が social control に関

して用いることばは、それによつて子どもが社会的学習の型を規定すると同時に、それ自体が役割体系、規範体系を反映していると考えられる。本研究の課題は、この後半の部分、つまり母親が social control に関して用いることばが、いかなる規範的性格をもつかを検討し、その背後に予想される家族のしくみとの関係を明らかにしようとするものである。このことがひいては、子どもの学習と主体形成という教育の問題を単に言語の構造だけに収めさせるのではなく、家族のあり方をも含む環境の問題として考察しようとする目的に通ずるであろうと考える。

## 2. ことばの分析の方向性

social control に関して用いることばは、上記のように社会化の媒体であり、同時に研究の立場からすればデータである。媒体であると同時にデータであることばを対象とした研究は、単なる統計上の相関を導くような研究を超えて、社会化のプロセスを明らかにするための道がひらかれている。言語的社会化の研究にはこの二面性を十分に生かした方法の開発が不可欠であると思われる。その方法とは日常用いられていることばを、それに近接した形を分析していく方法に他ならない。この具体的方法を案出するための基礎的方向づけが本誌表の目的である。

ところで、従来ことばの分析は、音韻論 (phonology) 統語論 (syntax) レヴェルで、また品詞の種類と数、その結びつき等の分析として行われてきた。一方、コミュニケーション研究では、R. F. Bales の12のカテゴリーを

用いる方法等で行なわれている。しかし前者は、ことばの機械的な分析であり、後者は肯定-否定というような瞬時的な分析にとどまっている。このような分析方法では言語のもつ社会性、特にことばの背景にある役割体系、規範体系にアプローチし得ない。ことばを歴史的・社会的に開かれた形で分析すること、すなわちことばのもつ意味の内容分析という意味論 (semantics) レヴェルでの分析方法の考案が不可欠である。

### 3. J. Cook-Gumperz の coding grid

上記の立場にたつて、母親が social control に関して用いることばの分析方法を考案しようとするとき、J. Cook-Gumperz の方法 — coding grid は一考に値する。彼女は social control の様式 (mode) の社会階層 (social class) を明らかにするために、インタビューによって得た social control に関する母親のことばを分析したのである。Cook は5才児をもつ母親を対象にして、日常よくある子どものトラファル場面を仮定し、それをどう control し、また何と言つて control するかをインタビューで調査した。そこで得られたことばを4つのセクションよりなる86の grid に分類した。それからそれらを統計的処理をして、control 様式の階層差を明らかにした。本発表の関心はこの grid にある。以下は grid の概要である。

grid の4つのセクションは、

- I. Rationale = 母親が自分の行なう control のタイプを正当化するためにいった回答 (対インタビュー-) を分類するセクション
- II. Strategies = 子どもを control するときにとる行為 (action) に言及した回答を分類するセクション
- III. Appeals = 子どもを言語的に control

するときに用いることばを分類するセクション

IV. Situational comments = トラファル場面が実際に起こる頻度、トラファルの責任の所在、母親のかかわりあい (involvement) への言及を分類するセクションである。しかもこの各々がさらにいくつかのサブカテゴリーにわかれて、そのサブカテゴリーがさらにわかれるという構成を grid にとっている。いわば4本の系統樹であり、その末端の86のカテゴリーにことばを分類していくのである。たとえば、次のように母親の回答は分類される。

◎ 子どもが学校へ行きたくないと言っている場面

ex.1 "I'd take him to school."

— < Strategies, Punishment, Removal >

(母親の control 行為, 子どもに対する罰則, その方法は強制的にトラファル場面から子どもを引き離す control 方法)

ex.2 "I tell her that all children must go to school at five."

— < Appeals, Position-oriented, Status rules (age) >

(母親は子どもに control の理由をことばで示し、その理由は子どもの年齢にまつわる規則に言及する地位志向である。)

### 4. coding grid による実際のデータの coding — grid の有効性と限界 —

本発表では日本語のデータを分析するさいの grid の有効性と限界を明らかにする。それは日本語のための grid 作成の一助になると考える。そこで実際のデータの coding を試みた。(対象は小5の子どもをもつ母親。そこで質問文と仮定するトラファル場面は、Cook のそれに依りながら改変したものを用い、今回は質問紙形式による Free answer とした。その結果

書きことばによる制約があること(は否めない。以下はその試みを通じての grid の批判的検討である。

### 1) grid の操作上の前提

coding grid は、Cook の理論的背景をなす B. Bernstein の提起した control の3様式 (Imperative control, Positional control, Personal control) を念頭におき、さらには階層が前提とされている。すなわち「階層—control 様式—母親の「ことば」という連鎖が仮定されている。このことから実際のデータの分析に介在する恣意性 (arbitrary system) —特に日本語の場合、意味を読み込まないと真意がわからない場合が多々ある—は階層比較によって不問に付される。この認識は重要である。

本研究の関心からすれば、家族の役割構造を比較の指標として、それと母親が social control に関して用いることばとの対照が課題である。

### 2) 英語と日本語の差違、英語から見た日本語の control

grid には主語による分類を用いる箇所がある。しかるに日本語では主語が明確ではない。このように英語と日本語の差違は当然大きな支障となった。しかしこのことは逆に日本語に特有な control のための表現をいくつか明らかにしうることにむかった。さてこの点こそ、日本語における grid の作成、分析の際に顧慮されるべきであろう。たとえば、grid に分類し、むずかしかったと思われる代表的なものとして次のような表現がある。

#### ① 「仮構的」な control の表現

ex. 友人を仲間はずれにしている場合、「自分がされた時のことを考えてみなさい」

これは必ずしも論理的に control の理由を示していない。そうではなく情緒的・心理的

に他者と同一化を求める、という意味で日本語による control の特色となっている。

#### ② 規範・命令的な control の表現

ex. 「仲よくしなければだめよ」

母親の「規範意識」が control の手段としての「行為の禁止の命令」と分ちがたく結びついている表現。「だめ」だから「だめ」“Don't”と“wrong”の一体化した論理。

#### ③ えん曲な control の表現

ex. 「なんで仲間はずれにするの？」

これは返答を求めるよりもえん曲な control になっていると思われる。

#### ④ 行為の原因に言及する control 表現

ex. コップを割った場合、「よそ見をしているからよ」

以上のような批判的検討をふまえるとき、Cook の coding grid は分析の道具として必ずしも十分だとは言えない。しかし、social control に関する母親の「ことば」をそのコミュニケーションの型と内容に立ち入って分析しようとした点は先駆的であるといえよう。すなわち、一方通行のコミュニケーション(か許すめ力 (power) による Imperative control, control の理由の説明が社会規範、権威に基づく Positional control, 子ども状況をも考慮しオープンなコミュニケーションを保証する Personal control という Social control の3様式をことばのレヴェルを明らかにした点、さらには、control に関する「ことば」とその背景にある規範体系、役割体系とのかかわりあい、よくは、社会構造とことばのかかわりあいを明らかにした点、これらの点のことばの意味内容の分析方法として注目に値すると思われる。

以上のように本発表では日本語による grid 作成のための方法的課題を中心に発表する。

(参考文献)

- ① Cook-Gumperz, J., *Social Control and Socialization*, R.K.P. 1973
- ② Bernstein, B., *Class, Codes and Control, Volume I, Theoretical Studies towards a Sociology of Language*, R.K.P. 1971
- ③ Bernstein, B., *Class, Codes and Control, Volume II, Applied Studies towards a Sociology of Language*, R.K.P. 1973
- ④ 麻生誠「能力の社会学」教育学研究39巻4号 1972
- ⑤ 中野由美子「階層と言語」教育社会学研究29集 1974
- ⑥ G.H.ミード, 榎葉三千男 他訳『精神・自我・社会』青木書店 1973
- ⑦ 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波書店 1973
- ⑧ 鈴木孝夫『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮社 1975
- ⑨ P.トランドギル, 土田滋訳『言語と社会』岩波書店 1975